短歌

教材のねらい

1 選定の理由

近代から現代に至るまでの短歌の歴史と、代表的な歌人の特長をつかめる作品を選んだ。伝統的な古典和歌と同じ三十一文字でありながら、明治・大正・昭和・平成と時代の変化と共に表現を模索し、進展させた過程をたどることのできる作品を揃えた。

まず正岡子規は古典和歌の約束事から離れ、観察と写生という自分の「目」と「ことば」をもって短歌を作る事を提唱した。与謝野晶子は女性による短歌表現の新境地を開き、浪漫性をふくらませた。若山牧水は旅情や風景を歌いながら深い象徴性を表現した。石川啄木は浪漫的なものへの憧れを抱きながら、厳しい現実生活や社会矛盾までも自らの経験として短歌に込めた。斎藤茂吉は正岡子規の提唱した写生を深め、自分の内面や精神をも活写した。齋藤史は時代の緊張感と精神性を皮膚感覚で表現した。寺山修司は戦後の大きな社会変化を体感しつつ、短歌を始めとする言語表現で独自の思想性を示した。春日井建は短歌に思想と深い物語性を潜ませ、現代短歌の可能性を広げた。俵万智は、口語や会話体を大胆に駆使し、現代短歌の画期となった。（短歌作品におけるエスプリをも含む。）

2 指導のねらい

「思想」とは、発想や歌作の根拠となる信条の他、アイデア

一首の短歌が、どのような真実や美、思想を捉えているかを読み取り、さらに短歌形式の表現・修辞の効果を理解させ、鑑賞させるようにしたい。歌の内容をつかみ、作者の感動の中心点はどこにあるのかを確実に捉える。そのためには内容・技法の分析と、作品への批評眼が必要である。批評には、それぞれの感受性の違いを踏まえた広い視点を持たせたい。まずは短歌のリズムに慣れるために、丁寧な音読から始めて、到達するねらいは次の確認である。

(1) 韻律上の特長は何か（同音の連続、など）。
(2) 修辞技巧は何か（区切れ、体言止め、など）。
(3) 主題は何か（望郷、悲傷、愛憐、希望、懐疑、など）。

3 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア

(2) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ

(3) 本歌取りや見立てなどの表現の技法とその効果について理解している。〔知・技〕(1)オ

(4) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア

(5)「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア

(6)「読むこと」において、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ

(7)「読むこと」において、文章の構成、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ

(8)「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ

(9) 進んで短歌の代表的作品を読み味わい、学習課題に沿って、好きな歌について、心情を表現するための工夫を見つけようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕